

盛義海水亭を訪れた俳人たち

二〇二五年十月四日(土)～十一月三十日(日)

表記のないものはすべて個人蔵

| 作者   | 句・資料名/制作年                         | 形状 |
|------|-----------------------------------|----|
| 白田垂浪 | 鵜のそれきり鳴かず雪の暮                      | 短冊 |
| 白田垂浪 | 灯がゆくよ江比間あたりの夕がすみ                  | 短冊 |
| 白田垂浪 | 寒春星盗のぞいてハ去ぬ曇り裏面 昭和二年二月華光兄のために     | 短冊 |
| 白田垂浪 | むし鳴くや夜の火かけが壁の下                    | 掛幅 |
| 白田垂浪 | 河鹿の聲の水を流るゝ昼飯かな                    | 掛幅 |
| 白田垂浪 | 藤垂れて路のぬかるみ澄みにけり                   | 掛幅 |
| 白田垂浪 | 花火音白夜の眠り澄みにけり                     | 掛幅 |
| 白田垂浪 | 小松砂丘拓本 夕風や浜蜻蛉につゝまれて / 昭和十八(一九四三)年 | 掛幅 |
| 白田垂浪 | 木より木にかよへる風の春浅き                    | 画帖 |
| 白田垂浪 | 夕風ぎや浜蜻蛉につゝまれて                     | 色紙 |

|      |                                       |    |
|------|---------------------------------------|----|
| 太田鴻村 | 汐さゐにからだを置けば海火すゞし                      | 掛幅 |
| 太田鴻村 | 樟若きこぞりて市の沸立つも                         | 色紙 |
| 太田鴻村 | かげろはむ伊良湖の貝をふところに                      | 短冊 |
| 太田鴻村 | 海水亭主人よりおくられて                          | 短冊 |
| 太田鴻村 | 石路植えて江比間の海の春此処に                       | 短冊 |
| 市川丁子 | 羽ばし鵜に干潟かげろふくまも無し 祝本館移築 / 明治三十二(一八九九)年 | 掛幅 |
| 市川丁子 | 鮎やせたり水の落葉の影おちて                        | 掛幅 |
| 市川丁子 | いさり火の星座を冒す暮の秋 裏面 昭和廿三年六月五日句碑除幕式記念     | 短冊 |
| 市川丁子 | 福江潮音寺 流人の名いとしむ雨に落椿                    | 色紙 |
| 市川丁子 | 江比間にて のまぬ酒にも酔まの里ハ 夏もあつさを知らぬさと         | 短冊 |
| 川合華光 | 汐おぼろ鱗のつきし手を洗うふ                        | 短冊 |
| 川合華光 | 汐おぼろ鱗のつきし手をあらふ / 二村紫山筆                | 掛幅 |
| 大沢梵寿 | 行秋や煮たてのめしの喰い進ミ                        | 掛幅 |
| 鈴木鵬子 | あるときの潮やどかりをのこし去り / 昭和十六(一九四一)年        | 画帖 |
| 河合薫泉 | 石門に輝きみちて初日の出 戊辰元旦 / 昭和六十三(一九八八)年      | 色紙 |

|       |                                                                                                                |    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 伊藤明峰  | 呼び止めん雪のしまきの煮干壳                                                                                                 | 短冊 |
| 松下木公子 | 伊良湖にて<br>船を待てば天来の鷹前二来て舞ふ                                                                                       | 掛幅 |
| 千賀一鶴  | 我等佇つかぎり沈まず二つの鶴                                                                                                 | 掛幅 |
| 千賀一鶴  | 伊良湖に遊ぶ<br>濱へ径とるや笹鳴にさそはれて                                                                                       | 扇  |
|       | 伊良湖にて<br>岬の冬はまごう辛らき実をもてり 飛鴻<br>群鴨へ沖の夕焼短かかり 薫泉<br>冬波の白波立つは燈の故か 麗眺子<br>絵すだれの風にうなじをうたれけり 草風<br>伊良胡への経のつゆけき野菊かな 一鶴 | 扇  |
| 尾竹竹坡  | 波に旭日図 絹本着色<br>/ 大正〓昭和時代前期                                                                                      | 掛幅 |
|       | 盛義海水亭 一階および二階平面図                                                                                               | 紙  |
|       | 愛知縣新十勝地 江比間海岸絵葉書<br>田原市博物館蔵                                                                                    | 葉書 |

盛義海水亭は、大正三（一九一四）年、江比間郷中に「盛吉屋旅館」として創業した。大正十三年、別館として海に面した渥美郡江比間村東山七番地一（現在の田原市江比間町東山七番地一）に名を「盛義海水亭」と改めて建立された旅館である。

渥美の地は奥郡とも言われ、明治、大正時代頃まではとても辺鄙な所であり、訪れる人も少なかったようである。江戸時代には、松尾芭蕉が弟子の坪井杜国を尋ねて江比間の地を通過したことがよく知られている。それとても細い山道を越えて江比間に至り、杜国の陰棲した保美に辿り着いた。盛義海水亭のある江比間の東端は、交通の便がよいと云える所ではなかった。

県道が出来ると、交通の便がよくなると共に、観光客も増え、渥美半島の中間地点で風光明媚な海辺の地として脚光を浴び、盛義海水亭は次第に注目され、遠方の客も増えた。平成二十（二〇〇八）年に廃業するまで、長く地域交流の施設として、夏の海水浴の拠点として、渥美半島を巡る観光の宿泊場所として、重要な役目を果たしてきた旅館の一つであったといえる。

館主の川合茂助氏は、俳号を華光という「石楠」の俳人で、若い頃から地元江比間の人々と俳句をたしなみ、自らの旅館で句会を催し、次第にその人柄を慕って、「石楠」の俳人たちも集まるようになり、「石楠」主宰の白田亜浪やその高弟太田鴻村、市川丁子らが度々訪れるようになり、この地方における俳人の拠点的な場所として、知られるようになった。

#### 参考文献

『盛義海水亭―収集俳句関係書画類報告書―』（田原市教育委員会、二〇二五年）※田原市内の図書館、愛知県内の一部の図書館などで閲覧できます。